

《評論》

漱石と白鳥

中村光夫

《評論》

漱石と白鳥

中村光夫

筑摩書房

昭和五十四年三月十日第一刷発行

〈評論〉 漱石と白鳥

著者 中村光夫

発行者 関根榮郷

発行所

筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話東京(三九一)七六五二(営業)
(三九四)六七一一(編集)

振替東京六一四一一二三

印刷 株式会社 明和印刷
製本 矢嶋製本株式会社

© 1979, M. Nakamura
1095-82111-4604
Printed in Japan

目次

文明批評家 漱石

漱石小論 I

漱石小論 II

夏目漱石・人と作品

「吾輩は猫である」

「三四郎」

漱石の青春

鷗外と漱石

文明開化と漱石

漱石の思想

漱石私感

3

8

21

35

57

63

73

98

112

126

140

*

正宗白鳥

161

白鳥小論

177

人と文学

182

白鳥感想

201

白鳥の作品

219

「日本脱出」

234

「微光」

245

「ある日本宿」

255

「異境と故郷」

259

「根無し草」

262

「作家論」

266

「自然主義文学盛衰史」

273

「流浪の人」他

276

あとがき

281

夏目漱石

文明批評家 漱石

百年前の一八五三年のちょうど今時分ペリーが浦賀に來ました。彼を「開國の恩人」あつかいする馬鹿馬鹿しさなどいままら云うまでもありませんが、彼の渡來が（同年のプチャーチンのそれと並んで）我國の近代史上の劃期的事件であり、ある意味でその出発点である以上、この百年を区切りにして我國の近代の性格を考へて見ることは決して無駄でないでしょう。

この百年間の自分の姿をはっきり把むことが、僕等が現在の生活について考える上でも、また將來の計画を立てる上でも、まず大切なことは誰にも解っているはずですが、それが實際にはひどく等閑視されています。おそらく変化がはなはだしすぎるのです。

柳田国男氏によると、百年という歲月は、時の流れに伴う社會の変遷を計るにちょうど適當な尺度とむかしからされていたということです。

「古人はこの『時の長さ』の單位を普通百年とし、モトセの後と語つてゐた。事實如何に保守的氣風の強い社會でも、百年の前と後とでは相當の変遷があつた。現に江戸時代などは一つのいい見本で……」と氏は云いますが、この江戸の末期にあたる百年前と現在との隔りは、柳田氏自身もみとめて

いるように、この「単位」がもはや通用しない新しい事態の到来を示しているようです。

僕等は正直のところ、百年前の父祖の社会組織の實際がどのように運営されていたか、人々の生活感情はどのようなものであったかについて何ひとつ適確な想像はできなくなっているし、第一そんなことを考えている暇はない、まして百年後の日本がどうなるかというような問題は、ここ十年のあいだに僕等の経てきた変化を思えば、考えるのも無意味だというのが、現代の生活の実状です。

しかしこういう生活が人々に満足をあたえるはずはなく、また精神の機能の本来が将来を予見することにある以上、この現代生活の慌しさと不安とが、過去を知ることが現在に生きる必要として僕等に課しているとも考えられます。

なぜなら現代に予測できない多くの事件がおこるのは、結局僕等が現代に行われている多くの事象にたいして無知であることを強いられていることから来るように、将来を多少とも正確に予測する手掛りは、できるだけ精細に過去を知ること以外にないからです。

過去の「現実」のあらゆるファクターを知れば、未来はそこから算出し得るとするのが決定論者の夢であるにしろ、歴史を創造の舞台と信じる者にとっても過去は精通することを必要とする土台であるはずで。

しかしこの土台が少なくとも意識の上で僕等から失われてからすでに久しいので、鷗外の「礼儀小言」など、これをはっきり警告した文章と思われませんが、漱石も同じ不安を、明治の末年に書いた文章のなかで、「吾等の過去は存在せざる過去の如くに、未来の為に蹂躪せられつゝある。吾等は歴史を有せざる成り上りものゝ如くに、たゞ前へ前へと押されて行く。」と云っています。

今日の日本はもはや「成り上り者」でさえないわけですが、明治時代に「欧米の列強」と肩を並べる代償として支払った過去との断絶と未来の不安とは、野望に敗れた成り上り者から受けついだただの遺産として、僕等の生活の内面の実質をなしています。

むしろこうした傾向は、たんに日本に限ったことでなく、「近代」の洗礼をうけた国はどこでもそうだと云えますが、我国では、その破壊的影響がとくに強く現われたのは、それが「西洋文明」という異質な文化としていわば力づくで接木されたことと、そのとり入れ方も相手が百年かかったことを十年で追いつくという余裕のなさであったことから来ていると思われます。

そして明治の文学全体もある意味では、こうした文化の異常性への、国民の意識の反撥と思われるのですが、それをもっとも明瞭な形で自分の問題としたのは漱石と云えましょう。

漱石の作品が、小説としてはいろいろな欠点を持ち、また風俗の変遷によって理解しにくくなった部分が多いにかかわらず、今日でも若い世代の読者を失わずにいる理由もここにあると思われる。

むしろ、漱石に限らず、明治大正の作家で文明批評家として一家の見識を持った者には二葉亭をはじめ、鷗外、荷風、有島武郎などを数えることができますが、同時代の日本の「文明」にたいする疑惑を、漱石のように一貫して持ちつづけ、それを創作の基礎にしたのは、ほかに荷風がいるだけです。面白いことに、荷風の文明批評が「冷笑」以後なまの思想としては姿を消し、娼婦の生態によって象徴されるようになったと同じく漱石も「野分」以後、「命のやりとりをする様な維新の志士の如き烈しい精神で文学をやつて見たい」という気持を、社会批判に拡大することを止め、知識階級の心理の追求に、制作の焦点を絞って行きました。ここに大正文学の性格と限界があると考えられますが、

しかし漱石はここで知識階級の心理をやはり「命がけ」で追求しています。

彼は「現代日本の開化」という有名な講演で、当時の日本文明の「外発性」を論じ、こういう文化のなかに生活する者は必ず心のなかにある空虚を感じるはずであり、もし感じないとすればその人は生意気で軽薄だと極めて強い口調で説いています。彼はこの知識階級の内面の空白を、日本文明の象徴と見、その解剖に全力をうち込んだので、言葉をかえて云えば、文明の問題を倫理に還元して、そこに自己の芸術の立脚地を見出したのです。

むしろこのことは、彼の作品のひとつひとつが文明批評のアレゴリイであったのを意味しません。すぐれた芸術はすべて倫理的だと、確信していた晩年の彼にとって社会の変動はそれが倫理の問題に響かねば興味の対象にならなかったもので、第一次欧州大戦にたいしても、ここになんら道徳的理想が賭けられていないという理由から無関心の態度をとっています。しかし逆に道徳の問題を当時の日本について考える場合、彼はいやでもその社会を支配する「文明」の性格につきあたったので、明治の開国は、彼の見解によれば、第一次欧州大戦と反対に、ひとつの道徳問題であったのです。

当時の日本が進んだ道にたいする漱石の疑惑は、根本的に云えば生きる必要のために、道徳を喪うことが正しいかどうかということです。彼の描いた小説の主人公は、みなこの作者の疑惑の体現者として、生存はしていながら、生活は失っています。

彼の小説が、表面の風俗の差を越えて、現代の青年たちに読まれているのは、現代が彼の疑惑の正しさをおそらく彼自身も予測しなかった不幸な形で実証し、彼が知識階級の悲劇として捕えた精神的空白を街頭の喜劇として演出していることを思えば、当然の現象です。

彼は、当時の知識階級がまだ自覚しなかった内面の空白を拡大鏡にかけて示すことによって、同時代の文明の病根を衝いたのですが、この否定的解剖の対象になった贖罪羊にたいして同類の意識は判つきり持っていました。

彼の独創が同時代の文明の性格を道徳の問題として捕えることにあつたとすれば、彼の誠実は道徳への意志を生きることによって、彼自身の無道徳を同時代に証明することにあつたと云えましょう。したがって、漱石の文明批評の具体的な内容を、一番はつきり示しているのは、彼の日記であり、ことに明治三十三年の英国留学から、明治の末年まで、彼がその個性の自覚を把む過程と表裏した時期のそれです。

そこに現われた「神経衰弱兼狂人」の漱石は、いわばその存在自体で同時代を裁いているので、小説家漱石は思想家漱石のはぐくんだ疑惑と憤りのほんの一部分しか表現できなかったことをうかがわせます。

(昭28・7)

漱石小論 I

——文学と俗物性

「俗物」にたいする文学者の対処の仕方は、或る意味で近代文学の諸流派の性格を決定する問題で、ロマン派と写実派の違いもそこにあると考えられます。

したがってこの問題にもっとも意識的に苦しみ、そこに表現の場所を見出したのは、フランスではフロオベルで、彼が「ボヴァリイ夫人」のなかで薬剤師オメエという俗物の典型を描き得たのもそのためです。

今日から考えても、文学者と俗物の問題の古典的典型は「ボヴァリイ夫人」のオメエにある、と僕には思われます。

我国の自然主義小説が、その範型としたフランス自然主義小説の根本にある作家の精神の劇をまったく無視して、この文学と俗物の問題についても感傷的なロマン派の域を出なかったことは、やがて我国の近代小説の性格に複雑な禍根を残していると思われませんが、それにはいまふれる必要はありません。ただこの問題が近代文学の根にからむ普遍的な性格を持つことを、まず明かにしておきたいと思えます。

チボオデエは「ボヴァリイ夫人」を論じて、オメエのレジオン・ドヌール叙勲で終る最後の一行に及び、オメエと彼の一族の繁栄はたんにここに止らず、二十年後に来る「共和国」がこれを完成し、彼等は更に社会の上流に登り、地方の名家になりあがるだろうと推測して、この小説の教訓は「適者生存」の理法だと云っていますが、俗物が俗物である所以は、少くとも彼等が文学者に投げかける最大の問題は、彼等がいつの時代にも社会における生存の「適者」であることで、芥川龍之介もそれについて次のように云っています。

「サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事実上不滅である。この事実を指摘したのは『進化論』の著者ダーウィンだった。彼等は今後とも地衣類のやうにいつまでも地上に生存するであらう。

『適者生存』は彼等には正に当嵌まる言葉である。」

そして我国の近代小説にもこの問題はすでに「浮雲」にはっきり扱われているので、文三と昇の対立に、作者は明かに詩人と俗物との対決を意識しています。二葉亭の独創はこのふたりの葛藤を単に理想主義と現実主義との相剋というような観念的な形でなく、生きた人間の性格の座標までそれを具象化し得た点に存するので、文三から見れば昇は課長の顔色を承けて、強いて笑ったり諛言を呈したり、四ッ這に這い廻って、乞食にも劣る真似をして漸くのこと三十五円の慈恵金に有りついた……「利の為にならば、人糞をさへ嘗めかねぬ廉恥知らず」であり、「反対に昇から見れば、文三は瘦我慢の世間知らず、意気地なしの見栄坊にすぎません。

この場合作者に近い存在はむしろ文三であり、彼は「自分の性質の或る点を develop して作り出した人物」と二葉亭自身も云っていますが、しかし同時に彼は文三が勝利者ではあり得ないことを明

際に意識していました。が、「多数であつて、而も現時の日本に立つて成功もし、勢もあるのは、昇一流の人物だらうと考へたのです」（『作家苦心談』）と彼自身云っています。

文三と昇との争いは新思想にかぶれた、軽薄な、しかし美しいお勢をめぐって行われますが、文三の熱愛しているお勢はついに昇に身を任せ、昇はお勢を弄んだだけで、課長の妹と結婚し、文三はこれらの一切の成行を予見しながら、拱手傍観するということに、未完の「浮雲」は作者の脳裡では組立てられていたからです。

すなわち「浮雲」の作者の思想では、おそらく世の中で最も醜い「蟻」とも蠅とも糞中の蛆とも言ひやうのない人非人」の昇がもっとも現実の社会では「適者」であり、したがって此世の最上の美の所有者であるので、その若々しいベシミズムは、フロオベルの少年期の作「スマル」に通ずるものがあります。

「俗物」を同時代の社会における最も生存に適した存在と考え、彼等を嫌悪する作家の熱情は、途中で岐路にそれない限り、当然同時代の文明批評まで行かねばならないので、二葉亭自身もその生涯を或る意味で、明治文明批評の実験に費した観があります。そうして彼の思想はその文学には充分に表現されなかったにしろ、彼が「浮雲」で未熟ではあつても正確に提出した、「日本文明の裏面」の問題は、さまざまの作家の精神にその反響を見出すとともに、現実の社会が、「昇一流の人物」によって支配される度が強くなつて行くにつれて、次第に深さと幅を増して行きましたが、それをもっとも正確に反映したのは、鷗外と漱石、それから少し違ったやり方で荷風だと思われまゝす。

鷗外と漱石の文学は、ともに同時代の文明（具体的には明治文化の基礎であつた文明開化の風潮）

に對する深い疑惑から生れ、それに対する批評を基礎としてゐる点で、二葉亭のそれと本質的に一致するものを持っています。

いまそのなかで、漱石について考えて見ます。

漱石の精神の歴史は大体三つに分けられます。第一は明治三十三年の彼の英国留学まで、第二期は外遊中から帰朝後彼が作家として立つ明治四十年ごろまで、それ以後は第三期と見られますが、そのなかでいま触れている問題についても興味のあるのは、第二の時期です。

この時代は彼が後に作家として実現した、或いは実現し得なかつた、思想の骨組がはっきりできあがつた時代であり、同時に彼とその環境との相剋が極点に達し、彼が周囲の社会といわば素手で闘っていた時代であるからです。

「倫敦に住み暮らしたる二年は尤も不愉快の二年なり。……帰朝後の三年有半も亦不愉快の三年有半なり。……英國人は余を目して神經衰弱と云へり。ある日本人は書を本国に致して余を狂氣なりと云へる由。……帰朝後の余も依然として神經衰弱にして兼狂人のよしなり。親戚のものすら、之を是認するに似たり。」と彼は明治三十九年の終りに云います。

そして彼を「否応なく驅つて創作の方面に向はしめ」たものが彼自身も云うように、この「神經衰弱と狂氣」であるとすれば、この時代の彼と社会との背離は、彼の文学のもっとも本質的な作因であつた筈です。

漱石がロンドンの客舎で、これまでの「他人本位」の、「根のない藻のやうに、其所いらをでたら